

# 受 賞 者 紹 介

<担い手育成部門>

公益財団法人 農林業公社しんしろ

<技術改善部門>

天 野 亘

<農業・農村振興部門>

有限会社 千姓

代表取締役 都 築 興 治

## 担い手育成部門



新城市

公益財団法人 農林業公社しんしろ

公益財団法人農林業公社しんしろは、地域の農林業振興を目的として平成8年に設立された財団法人農林業公社つくでを前身とし、平成24年に公益財団法人の認定を受け発足しました。発足以来、地域の農林業関係機関や地域住民と連携しながら、農地利用効率化のための農地利用集積円滑化事業・農地中間管理事業に取り組むほか、農作業受委託、担い手育成・研修、自然薯種いもやしいたけ菌床ブロックの受託生産、都市農村交流など様々な事業を実施しています。

中でも地域の最大の課題である高齢化と過疎化による担い手不足を解消するため、平成24年の発足当初から「新城市アグリチャレンジ相談会」を地域外の都市で開催するとともに、「栽培施設現地説明会」を開催して実際の営農現場の見学やJA・公社の営農サポート体制の説明を行うことにより、定住や就農のイメージをつかめるよう工夫し、地域外から新規就農を志す若者たちを積極的に受け入れてきました。

新規就農者が栽培する作物は、地域で産地化に取り組み、かつ、安定して高収益を見込むことができる施設野菜の「トマト・イチゴ・ハウレンソウ」に絞り、JAの営農施設のリースによる提供や産地部会のサポートを同時に行い、地域ぐるみで就農をサポートしています。独自の研修や農地・空きハウスの斡旋、農業制度資金・補助金の利用支援、住居費補助などの手厚いサポートにより、平成24年以降に公社で研修を受けた27名のうち24名が地域に定住し、地域の主力作物（トマト・イチゴ・ハウレンソウ）の農業生産をリードする存在にまで育っています。

都市部と離れた中山間地域でありながら、地域独自の就農支援体制を築き上げ、地域外から農業に関心のある若者を積極的に呼び込み、地域の担い手の確保・定着につなげています。

また、小規模農家の営農継続支援（農地貸借の仲介、農業機械の貸出）、地域住民との交流事業による地域農業理解の促進などにも取り組み、担い手支援を始め、幅広く地域農業の活性化を牽引する役割を担っています。

## 技術改善部門



田原市

あまのわたる  
天野 亘

天野亘氏は、碧南市のイチジク農家の次男として生まれ、愛知県立農業大学校を卒業し農業資材会社で3年間働いた後、平成10年に田原市の施設花き（デルフィニウム）農家の天野千栄子氏と結婚し、平成13年からビニールハウス2棟20aを譲り受ける形でイチジク栽培を開始しました。平成28年にはイチジク専作に切り替え、前職の経験を生かしながら栽培技術や経営面での様々な改善に取り組み、現在では、家族4人によるイチジク専作農家として、加温ハウス81a、無加温ハウス8aの経営規模から1,000万円以上の農業所得を実現しています。

また、自農場の改善にとどまらず、地域のイチジク生産の技術向上や生産拡大等、イチジク産地の基盤づくり・拡大に向けた活動も積極的に行っています。

技術面では、限られた労働力で大規模栽培を行うため、ハウスを7区画に分けて収穫時期をずらす「ローテーション収穫」を考案し、家族労働力による大規模経営を可能にしました。また、採光性の良い軒高ハウスにより30～45段もの長段栽培を導入し、さらに自ら考案・実証した「マルチのテント張り」による効果的な樹勢管理を行うなど、イチジク栽培における省力化、多収・高品質化を実現しています。これらの栽培技術は、地域の伝統的な栽培技術とは異なる独自の方法であり、イチジクの生産性向上に大きく貢献しています。

地域への提言も活発に行い、現在のJAあいち経済連パッキングセンターの先駆けとなる地元JAの共同選果体制（ばら受け共選）を県内で初めて実現し、イチジク農家の収穫調整作業の削減と経営規模の拡大に貢献しました。

さらに、担い手となる若者の就農や品目転換のために、研修生受け入れや栽培技術の公開と経営相談などを積極的に実施し、地域のイチジク生産のリーダーとして活躍しています。

令和3年には子息が後継者として就農したことから、イチジク栽培への情熱はますます高揚し、さらなる規模拡大と品質にこだわった生産を継続することにより、ハウス面積1haの日本一のイチジク専作農家を目指しています。

## 農業・農村振興部門



阿久比町

有限会社<sup>せんしゅう</sup>千姓 代表取締役<sup>つづきこうじ</sup>都築興治

有限会社千姓は、都築興治氏の父重信氏が平成18年に設立した水稻の生産販売を中心に行う農業法人です。平成23年に山梨県の農業法人で約3年間の研修を経験した興治氏が就社・就農すると同時に野菜部門「つづき農場」を立ち上げ、野菜の生産と販売へ事業を拡大し、現在では、従業員40名（正社員10名）、年商約2億円の経営規模を有する県下有数の農業法人に発展しています。

平成24年に代表取締役となった都築興治氏は、現在までに経営面積を3.7倍、売上を4.3倍へと急速に経営を発展させました。経営面積の拡大には耕作放棄地を積極的に受け入れ、農地の再生・保全による農業生産の拡大とともに、農村景観の維持・改善に大きく貢献をしています。周年収穫できる野菜の栽培体系を組み、自社の特別栽培米とともに近隣のスーパー、産直、レストランなどへの販売ルートを拡大し、継続的に供給できる体制を構築することにより売上げを大きく伸ばしました。経営管理面では、ICT作業管理ツールの活用などにより、現場の無駄を省き効率化・コスト低減を実現し、地域のモデル経営となっています。

また、父重信氏を含む20人の農家が平成8年に立ち上げた「阿久比米れんげちゃん研究会」活動を継続し、特別栽培米「阿久比米れんげちゃん」ブランドに加え、化学肥料と農薬を使用しない新たなブランド「れんげちゃん黒」に取り組むなど、環境保全型農業の推進においてもリーダー役の一人として、地域を先導する役割を果たしています。

さらに、地域農業の活性化のために、研修生の受入・独立支援を積極的に行い、平成24年から現在まで10名が独立自営就農し、それぞれ地域農業の担い手として巣立っています。

小学校と連携したコメ作り教室や消費者向けに農業体験イベントを企画・開催し、子どもたちや地域の人たちへの食育活動にも力を入れています。

以上のように、優れた経営感覚と実行力による農業経営と地域貢献を通じて、農業を人が集まる魅力ある産業にするという目標に向かって邁進しています。